

私の被爆体験から

沢田 昭二

1945年8月6日、原爆が投下されたとき私は13歳でした。

その日私は病気で、爆心地から1400mの自分の家において、原爆が投下された瞬間、私は眠っていました。そのため、ピカッと光った閃光も、ドンという衝撃音も知りません。原爆の破壊はそれほど瞬間的なものでした。

気がついたときは、つぶれた家の下敷きになっていました。必死にもがいて、壊れた家の中から、やっと這い出すことができました。潰れた家の上に立ち上がったとき、外は暗闇でした。朝日を遮った焦げ茶色の空気はやがて茶色から黄色に変わり、白っぽくなって、最後に遠くが見えるようになりました。その瞬間、私はびっくりしました。広島街全体が、見渡す限りつぶれて平らになっていたのです。私には何が起こったのか見当が付きませんでした。

その時、すぐ足下から私の名を呼ぶ母の声がしました。母と私はそんなに離れていないのに、母の声はとても遠くからのように聞こえました。それは、母の声が、壊れた屋根や幾重にも重なった壁土や材木に遮られているからだとわかりました。

母は、脚を太い柱か梁に挟まれて動けないと言いました。私は持てる力いっぱい梁や柱を引き抜こうとしました。壁土をめくりとろうと力いっぱい押し上げてみました。しかし、私の力ではどうにもなりません。大人に助けを求めましたが、怪我をしている大人は、自分が逃げるのが精一杯でした。母を助けようとしながら、

「大地震が起きたんね」

と尋ねますと、母は

「いや違う。大きな爆弾が家の近くで爆発した」

と答えました。

初めは、破壊された建築物の残骸に火がついていることに気づきませんでした。原爆が爆発

した瞬間に、燃えるものには火がついていたのです。しばらく、くすぶっていた火が次第に強くなってきました。火が迫ってきたことを母に話すと、母は

「お前は生き残って、よく勉強して立派な人間になりなさい」

と言ってくれました。

さらに火が強くなったとき、母は

「あきらめなさい。母さんはもういいから、ここから早く逃げなさい」

と言いました。私は母を置いて逃げるのを躊躇していました。

大きな火事嵐が起こったそのとき、母から火は見えないはずなのに

「今すぐ逃げなさい」

と命令のように言いました。その声は遠くてかすかでしたが、きっぱりとした言葉でした。この言葉は私に、母を残して立ち去る覚悟をさせました。私は

「お母さんごめんなさい！」

と言って、その場から逃げ出しました。これが、私が母とかわした最後の会話になりました。

道がなく、炎と煙の中を逃げました。潰れた家が折り重なり、ひどく火傷をした人が逃げているのしか見ていません。焼けただれた皮膚があごや爪から垂れ下がっていました。やっとのことで川岸にたどり着き、川を泳いでわたり、砂浜に突っ立って、対岸が激しく燃え上がっているのを眺めつづけました。煙と炎は雲になって私の頭上に覆いかぶさってきました。あの炎の中にいる母のことを思うと、はらわたが千切れる思いでした。「何とかして助けることができなかつたらどうか？」今でも母のことを想うたびに、同じ思いをめぐらします。

私が大学生だった1954年3月、米国が南太平洋のビキニ環礁で水爆実験を行いました。その水爆は私の体験した広島原爆の1000倍の破壊力でした。私が専門にしようとしていた物理学によって人

類と地球上の生き物が滅亡すると大きな衝撃を受けました。それ以来、学生として、科学者として、核兵器をなくす運動を続けています。

今、私は広島と長崎の原爆被爆者の間に起こったことを基礎に放射線の人体影響の研究をしています。その結果、米国など核兵器国の政府が管理して行う放射線の影響に関する研究では、放射性降下物と誘導放射物質による残留放射能の影響が完全に無視していること、残留放射線の影響は主として内部被曝(ばく)によって起こり、被爆者に大きな影響を与えていることもわかりました。

地下に貫通して爆発する核兵器をつくれれば破壊範囲が小さくて「使いやすい核兵器」ができるという考えがありますが、こうした核兵器を使うと、大量の残留放射能による内部被曝によって広島・長崎とは別の「この世の地獄」が出現するでしょう。被爆者にとって、核兵器を使うことは人類の歴史上もっとも許されざる犯罪であることは明らかです。誰に対しても、どんな目的と理由があろうとも核兵器を使ってはなりません。核兵器で報復するという考えはもってのほかです。

東日本大震災で、福島原子力発電所が水素爆発事故を起こし、多くの人々が放射線に被曝をしています。その主な影響が内部被曝です。

私は、人類に対して核兵器廃絶のために2重の責任をもっており、これが母の最後の言葉に応えることだと考えてきました。責任の一つは、科学者あるいは物理学者として核兵器使用の非人道性を明らかにする責任です。もう一つは、あの日の惨状を体験した被爆者として訴える責任です。

今こそ核兵器を廃絶する時です。不道德な核兵器でおどす国際政治から抜け出し、核兵器を禁止する条約をつくるための誠実な交渉を始める時を迎えています。

それとともに一旦事故が起これば人間が制御できない状態になり、事故の規模によっては地球が住めなくなる可能性もあります。事故が起こ

らなくても原発の運転によって処理方法がまだわかっていない高レベル放射性物質がどんどん貯まる一方で、地球が年々住みにくいところになっています。いま人類は放射能におびえることのない未来をつくる時を迎えていると多くの被爆者が思っています。

さわだ しょうじ:素粒子物理学の理論的研究、名古屋大学名誉教授、原水爆禁止日本協議会代表理事



絵 安土じょう